



※「つるみん」平成26年度第38回鶴嶺祭『ゆるキャラグランプリ』でグランプリを受賞。1年2組小山田夏芽さん、鬼塚麻未さん（旧クラス）の作品で、その思い（願い）は、3つ。・「世界中を飛んで、鶴嶺の名を広めている鶴」・「好きなものは笑顔と思いやり」・「鶴高生と協力して、世界中を笑顔にするのが夢」です。

夏休みが終わると、すぐに、文化祭というスケジュールは楽しくのんびりの生活から、180度高校生活に戻れるステップになりますね。全校生徒一丸となって文化祭を盛り上げましょう！図書館前には無料の本と雑誌を出しますので、見に来てください。

司書



◆新着本コーナー



◆テレビ映画の原作本



◆2学年修学旅行のための北海道関連本資料

今月のおすすめ本 (司書 ver.)

『朝が来る』 辻村 深月【著】 文芸春秋【出版社】

今までの辻村作品ではありません。養子をもらった夫婦に、ある日、子どもを返してという電話、突然の出来事はどんな展開で終わるのか、終盤はハラハラドキドキでした。図書館に所蔵しています。読んで見てくださいね！

高校時代読んだ本

4 5 6 7 9 10 11 12 1 2 3

自分を築いていこうじゃないか！

「自分は一体何者なんだろう。何のために生まれてきて、何のために生きているんだろう。」中学生から高校生にかけて、程度の差こそあれ誰でも一度はぶつかる哲学的な疑問ですよね。シェル・シルヴァスタイン著『ぼくを探しに』が世に出てきた時に、絵本というジャンルにもかかわらず、大人たちが夢中になり、「自分探し」なんてしゃれた言葉が流行したのですが、私が高校生の頃にはまだそんな言葉はありませんでした。

高校生の頃、私に強く「自我」というものを意識させてくれた本は、ヘルマン・ヘッセ著の『デミアン』（新潮文庫）でした。明るい世界と暗い世界、善と悪、男と女、単純な二元論的世界観で構成されている幼少期から少年期、主人公シンクレールがそんな既存の世界観を破壊して、自我に目覚めていく過程を丁寧に描いた作品で、その中のいくつかの言葉が私自身の自己形成に様々な形で影響を及ぼしているなど今更ながらに思います。たとえば「鳥は卵の中から抜け出ようと戦う。卵は世界だ。生まれようと欲するものは、一つの世界を破壊しなければならない。」という言葉とかね。全き自己を手に入れるには、自分を探しにお外を散歩しても意味がない。その時々々に人とぶつかり、事柄とぶつかり、痛みへのたうちながら一つ一つの殻を破っていくしかない。そういうことに気づかせてくれた本だった。若干神秘主義的な面もあり、今風にいうなら中二病的要素もなきにしもあらずだが、第一次世界大戦終了後の荒廃したドイツにあつて、スピリチュアルなものを若者達が、何より作者自身が必要としていたのかもしれない。

時の経過に伴う様々な出会いによって、人間は日々変化していく。本格的に自己と向き合い始めるのは高校時代の今として、これから死の時を迎えるまで人は延々と自己を築き上げていくことになる。他に對して言い訳せず、また、責任を転嫁せず、堂々と自分自身を築き上げていこうじゃないか！

シェル・シルヴァスタイン【著】『ぼくを探しに』 講談社【出版社】
ヘルマン・ヘッセ【著】『デミアン』 新潮社【出版社】

国語科 M.Y.

